

AGU 環境人文学フォーラムの発展

Developing the AGU Environmental Humanities Forum

研究代表者 結城正美

Masami YUKI

本研究プロジェクトは、2021 年度に文学部附置人文科学研究所研究プロジェクトとして始動した AGU 環境人文学フォーラムの発展を目的とするものである。

環境問題のそもそもの原因は人間のものの考え方や価値観にある。文化、歴史、言語、ジェンダー、人種をはじめとする多様な問題域において、人文学は意味や価値の問題に取り組んできた。そうした人文学の知を結集して環境の問題に取り組み、危機的な地球システムに人文学を再登録する動きが環境人文学 (environmental humanities) である。

プロジェクト二年目の 2022 年度は、新たにチェルシー・シーダー・経済学部教授と橋本智弘・英米文学科准教授をメンバーに迎え、サウンドスケープ研究（鳥越けい子）、日本文学（佐藤泉）、米文学（西本あづさ）、英文学（松井優子）、言語哲学（エリン・マクレディ）、現代史・ジェンダー研究（シーダー）、ポストコロニアル文学（橋本）、環境文学・エコクリティシズム（清水美貴、結城）といった多分野を横断する対話を試みた。具体的には、オンライン研究会を通して、メンバーが個別に進めてきた研究を環境という視座からとらえ直し、相互の研究の接点を可視化することにより、環境をめぐる問題を多角的に考察する学術的コミュニティ——AGU 環境人文学フォーラム——の発展を目指した。オンライン研究会は、メンバーだけでなく学内外にも開いてオープンなカタチで開催した。

2022 年度に顕著な動向として、国外を拠点とする研究者とのネットワーキングが挙げられる。オンライン研究会で研究報告していただいたケイト・リグビー教授（ケルン大学）は、環境人文学発祥の地であるオーストラリアに続いてイギリスの大学で環境人文学プログラムを牽引した後、ドイツのケルン大学での環境人文学プログラム設置において中心的な役割を果たしているエコクリティック（環境文学研究者）である。ケルン大学は本学の交流協定校であり、2021 年度に同校の環境人文学セミナーシリーズ（オンライン）で結城が講演したことを機に環境人文学における研究交流が始まり、リグビー教授による AGU 環境人文学フォーラムでの講演が実現した。また、ポスドクのダニエラ・ラゾロスカ氏（受入教員：シーダー教授）、客員研究員ハナ・ボースト氏（受入教員：結城）にもオンライン研究会でそれぞれの研究について報告していただき、その後も交流が続いている。

各研究会の概要を以下に示し、2022年度の活動報告とする。なお、オンライントークの番号は、2021年度からの通し番号である。

Online Talk #9 (16 April 2022)

西本あづさ（英米文学科・教授）「〈モア・ザン・ヒューマン〉とアフリカ系アメリカ文学」

ポスト公民権運動時代のアフリカ系アメリカ文学を半世紀にわたって牽引し一昨年夏に88歳で没した Toni Morrison (1931-2019) は、「[合衆国では] 活字にされた黒人文学の起源は奴隷体験記にある」とかつて述べた。現在の合衆国にあたる地域でのアフリカ系のディアスポラの歴史は、記録上、1619年にオランダの奴隷船によって水や食料の補給と引き換えにジェイムズタウンに「陸揚げ」された20人の男女から始まる。奴隷制度と制度廃止後も残った人種主義の中で〈ヒューマン〉であることを疑われ蹂躪された経験と、それに抗して自らの〈ヒューマニティ〉を証言する必要性と意思とは、合衆国でのアフリカ系の人々の文学的営為の始まりと深くつながっている。さらにその「活字にされた文学」の周辺には、歴史に名が刻まれなかった人々の奪回不可能だが確かな存在の連なりを示唆して、アフリカ系の書き手たちの想像力／創造力を鼓舞してきた口承文化の領域が広がっている。

本発表では、そうしたアフリカ系アメリカ文学の背景を参照した上で、まったく異なる持ち味の二人の作家 Morrison と Octavia E. Butler (1947 - 2006) の仕事の一端を駆け足ながら概観する。Morrison については、自らを周縁化する世界で書くという行為をめぐる作家が1980～90年代に繰り広げた議論のいくつかを改めて紐解いてみる。一方、サイエンス・フィクションの分野でアフリカ系の女性作家として初めて高い評価を得た Butler については、異星生物と人間が相互のサバイバルを賭して交わり共生する世界を描き、ヒューゴ賞とネビュラ賞を受けた短編“Bloodchild” (1984) を紹介する。二人が提示した問題系や世界観を糸口に、〈モア・ザン・ヒューマン〉とアフリカ系アメリカ文学の一筋縄ではいかない交差について考え始めることができれば幸いである。

Online Talk #10 (27 May 2022)

Kate Rigby (Professor, Environmental Humanities, University of Cologne)

“Transformative Research for Perilous Times: Perspectives from the Environmental Humanities”

This lecture provides a brief introduction to the environmental humanities as a multi-, inter- and transdisciplinary research field as it has emerged and developed over the past two decades. It then focuses in on the question as to what might be considered to constitute ‘transformative research’ in this field: transformative, that is, with respect to both the conventional methods and questions of discrete disciplines in the humanities, and to potential research impacts beyond

academia. Particular attention will be given to the three broad areas of enquiry that will lie at the centre of the work of the newly created research hub for Multidisciplinary Environmental Studies in the Humanities at the University of Cologne over the coming years: ‘decolonial cultural ecologies’; ‘multispecies conviviality’; and ‘disaster preparedness’.

Online Talk#11 (11 June 2022)

Richard Evanoff (Professor, International Communication and Ethics, AGU)
“Basics of Bioregionalism”

This presentation offers an introductory overview of bioregional thought and practice for researchers in the humanities. The presentation covers the history of the movement, the aims of bioregionalism, and how bioregionalism’s emphasis on cultural diversity challenges the current global paradigm, not only politically, economically, and socially, but also in the fields of philosophy and literature.

Online Talk#12 (25 June 2022)

Hannah Boast (Assistant Professor, Literature and Environment, University College Dublin/ 本学客員研究員)

“Modern Water and Cheap Nature in Japanese Literature: Re-reading Ishimure Michiko”

Activist-writer Ishimure Michiko (1927-2018) is often described as ‘the Japanese Rachel Carson’. Best-known for her campaigning around Minamata Disease, particularly her work *Paradise in the Sea of Sorrow: Our Minamata Disease* (1969, trans. by Livia Monnet), Ishimure also published widely on other aspects of Japan’s industrial development and its impact on marginalised rural communities. Her novel *Lake of Heaven* (1997, trans. by Bruce Allen) focuses on a fictional village destroyed for the construction of a dam, addressing Japan’s status as one of the most dammed countries in the world. This talk situates Ishimure’s work in the context of recent conversations across literary studies, environmental history and cultural geography on world-literature (WReC), world-ecology (Moore), and state hydromodernism (Swyngedouw, Linton), showing the resonance of Ishimure’s writing on Japan’s post-war modernisation with broader contemporary debates on literature and water crisis.

Online Talk#13 (16 July 2022)

大小島真木 (現代美術家)「風土を喰らう」

私はアーティストとしてこれまで様々な場所に赴き、それぞれの土地に滞在し、制作を

行ってきました。その際、私が大事にしているひとつのイメージがあります。それは「風土を喰らう」というものです。

「風土を喰らう」とは、その土地で採れた野菜を食べること、肉を食べることにとどまりません。その土地で育ったものを食べるということは、その土地の土を食べることでもあり、その肉が育った森を、ひいては森を包み込む大気や空を食べることでもあります。あるいは、風土を喰らう、ということの意味は物理的な「食べる」ということばかりを意味するものでもありません。その土地で生きている人とのコミュニケーションや、あるいはその土地が育んだ文化や習俗などに触れることも含めて「喰らう」ということなのだとは私は考えています。文化と自然を超えて「風土を喰らう」という視点を持つことは、ある土地と関わり、ある土地を学び、またある土地の一部となっていく上で、とても意義深いことのように感じています。

もちろん、私は風土をただ喰らうばかりではありません。私もまたそこで喰らった風土を咀嚼し、消化し、分解し、また違う形で排泄、表現していくのです。風土を喰らい、そして、風土に喰られること。私を喰らうことで風土にもまたなんらかの影響があるかもしれません。風土はある形に固定されたものではなく、常に移ろいながら、変化し続けるものでもあるのです。私たちは誰もがそうした風土をめぐる循環構造の中に生きているのであり、私にとって「制作」とは、そのプロセスへと身を投じ、そのプロセスの一部として、自らを風土として生成することでもあります。

本トークでは、私が過去に行った滞在制作の模様、「風土を喰らい」かつ「風土になる」実践のいくつかを紹介したいと思います。

Online Talk#14 (15 October 2022)

結城正美（英米文学科・教授）「いま、環境人文学について考えていること」

環境問題は物理的環境に現出するが、問題の根っこにあるのは人間のものの考え方や価値観にほかならない。環境をめぐる価値や意味に関する研究は人文学諸分野の強みである。これまで蓄積された知を再調整しながら人文学諸分野が協働する動きが醸成され、1990年代後半にオーストラリアで生態学的人文学(ecological humanities)という学際的共同研究が創発し、北欧や北米でも同様の動きが展開し、そうした一連の動きが2001年に環境人文学とよばれるようになった。そのような経緯や環境人文学の抱える課題などを、拙稿「正常の終焉、思考の再調整——環境人文学への誘い」(『思想』2022年11月号掲載予定)に整理したので、本報告では、その内容をかいつまんでお話しする予定である。また、拙稿では十分に論じられなかった、危機とともに生きつづけるための知のマトリクスとしての環境人文学について私見を述べてみたいとも思っている。以上をたたき台として、みなさんと議論を交わしたい。AGU 環境人文学フォーラムが立ち上がって一年半が経った現在、何が変わっ

たのか／変わらないのか、といったことについても意見交換できればと思う。

Online Talk#15 (19 November 2022)

Chelsea Szendi Schieder (Professor, AGU) and Daniela Lazoroska (Postdoc, AGU)

“Tricksters and Troublesome Women: Strategies of Gendered Identities and Social Change in Two Moments in Postwar Japan”

In this discussion, Daniela Lazoroska and Chelsea Szendi Schieder introduce two moments in postwar Japanese social movements that may be used to reconceptualize ideas about gendered political and social participation. Lazoroska explores women’s experiences of leadership in solar energy communities in post-3/11 Japan, and their appeal to “disembodied” knowledge as a way of evading positioning. Schieder discusses how women’s entry into postwar Japanese politics was predicated on an idea about women’s “apolitical” authenticity, a strategy that defined much of the housewife activism of the 1950s and 1960s. In conversation, we tease out the resonances, and reflect on which subjects or political subjectivities are seen as possessing moral legitimacy to instigate social change. We propose the framework of the “trickster” to explore how some politically active women may play in the space between gendered social expectations and may risk the label of the “troublesome woman,” but instead employ strategies that successfully justify their actions. With these brief provocations, we hope to open onto a larger discussion about who is a trickster and who is dismissed as merely disruptive. And what does this mean about the possibilities and constraints for transformative politics? We end with reflections on the potential the trickster figure has for thinking pro-environmental and norm critical behavior from an environmental humanities perspective.

Online Talk#16 (17 December 2022)

橋本智弘（英米文学科・准教授）「気候変動を読むこと／書くこと」

気候変動という巨大な現実を前にして、文学を読む者と書く者はどうすればいいのか。人間の活動が地層や気候に甚大な影響を与えはじめた時代は「人新世」と呼ばれ、その定義と含意について自然科学のみならず人文学においても議論が進んでいる（例えば、Dipesh Chakrabarty の一連の著述）。一方で、人新世の概念が喚起する、差異化されていない「人間」が「自然」に破滅的な作用を及ぼすというイメージは、帝国主義、家父長制、人種差別といった問題を埒外に置いてしまうのではないかという疑義も出されている。このトークでは、「世界＝生態」（world-ecology）のパラダイムを提示する環境史家 Jason Moore とその影響下で斬新な世界文学論を展開する文学研究者 Michael Niblett を取り上げ、近代がどの

ように周縁の地域においてエコロジカルな危機をもたらすか、そしてそれをいかにして文学に読み込むことができるかを考えたい。同時に、作家の Amitav Ghosh の近年の思索を追い、小説において気候を主題化することの可能性と困難について考えたい。私のもくろみは、気候問題を他の近代の諸問題と連続したものとして捉え、文学を通じてそれら問題系を批判的に考える方法を模索することにある。

Online Talk#17 (28 January 2023)

藤原辰史（京都大学人文科学研究所・准教授）「分解の哲学」

生態学の概念である「分解」は、いきものの死骸やいきものから剥がれ落ちたものを食べて出すことで、最終的に二酸化炭素、無機栄養塩、水にまで還元するプロセスのことである。これを担ういきものを「分解者」と呼ぶ。この発表では、「分解」という概念を、自然、精神、社会をつなぐ結節点と位置付け、この概念を通じて、文理に加え芸術を加えた総合的知のありかたを考えていきたい。

2022 年度の活動は以上のとおりである。なお、AGU 環境人文学フォーラム開始以降の活動と関連情報は、ウェブサイト <<https://www.agu-environmental-humanities.com/>> で公開している。